海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	市島　諒二　印
所属機関	日本大学病院　消化器内科
・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会･会議名	米国消化器病週間(DDW) 2019
渡航期間	自 2019/05/18 至 2019/05/21
・研究内容 ・国際学会・会議内容	Poster session

研究成果　（　要約：800字　）

今回、研究助成金を頂き、DDW2019にて発表をして参りました。
発表内容は、胃U領域早期胃癌に対するstrip biopsyの有用性と安全性についてである。リンパ節転移のない早期胃癌の標準治療として内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)が広く行われている。しかし、胃U（上部）領域におけるESDは手技的な難易度が高く、治療時間は他のM（中部）、L（下部）領域と比較し長くなり、偶発症率も高いとされる。Strip biopsyは1980年代に開発された手技であり、EMR-CやEMR-Lと同様にEMR法の一種である。一括切除率はESDと比較して劣るものの、治療時間が短く、簡便に行うことができる。 Strip 群と ESD 群で短期治療成績を比較すると、病変径（6.0mm vs. 15.4mm）、切除径（13.4mm vs. 34.2mm）、平均治療時間（4.0分 vs. 46. 0分）、一括切除率（100% vs. 97.5%）であった。Strip群はESD群と比較し有意に病変径、切除径ともに小さい傾向にあったが治療時間は短く(P<0.05)、一括切除率に差はみられなかった。また、ESD群で穿孔2例（5%）、後出血1例（2.5%）偶発症を認めたがstrip群では認めなかった。また、<10mmの小病変で、Strip群とESD群で比較すると、病変径(4.0mm vs. 6.0mm)、切除径(12.0mm vs. 27.0mm)、平均治療時間(4.0分 vs. 40. 0分)、一括切除率(100% vs. 100%)であった。以上の結果から ESD による治療難易度が高い U 領域でかつ小病変に対しては strip biopsy が有用であり治療法の１つの選択肢となりうることがしめされた。
Poster sessionであったが、特に海外の医師を中心に反響が大きく、strip biopsyの方法や適応などを中心に様々な質問を受けた。
今後、論文化をして、本学会に参加しなかった消化器内科医にも本検討の有用性を認知していただけるように努めていきたいと考えている。
自身以外の発表では、ポスター、オーラルでの発表問わず、様々な発表を見聞し積極的に質問もし意見交換を行った。今回の助成を受け、DW2019に参加させていただき、貴重な経験をすることができた。
ありがとうございました。